様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３４３１０
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｈ０３２３５

研究課題名（和文）戦争と障害の比較史的研究

研究課題名（英文）A History of Disability in Modern Era: The Impact of World War II on People with Disabilities

研究代表者
山下　麻衣（Yamashita, Mai）

同志社大学・商学部・准教授

研究者番号：９０３８７９９４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　9,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、包摂や排除された障害者がどのように生活を維持していたのかを明らかにすることにあった。障害者の生活という問題は、人は生きていかなければならないという生物の基礎原理が背後にある。とりわけ、戦時期には先天的障害のみならず、生活の困窮や戦闘による障害者の増加によって障害者の存在が顕在化した。この戦時期の経験は、戦後の日本の障害者福祉のあり方を決める大きな要因の１つとなった。本研究では、第１にこのように顕在化した障害者がどのように生活を成り立たせてきたのか（障害者の生活費の問題）、第２に障害者の生活に影響するどのような社会制度が存在してきたのかについて明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　日本が経験した近代戦争のうち、第二次世界大戦における犠牲の度合いは桁違いに大きかった。この犠牲には障害者数の急激な増加も含まれる。障害者数の急増は障害者の生活問題を浮き彫りにし、日本社会が障害者の存在をより意識できうる環境を作った。障害者は健常者の利害を判断基準とし、社会へ包摂もしくは排除されてきた。本研究では、戦後、顕在化した障害者が、どのような制度をどのように利用しながら生活したのか、そのプロセスにどのような問題点があったのかを浮き彫りにした。この視点に基づいた研究を継続し、卓越した能力を持つ存在、社会的弱者では必ずしもない多様な障害者がいかにして社会で生きてきたのかを示した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to study the history of the lives of disabled people in modern Japan.

The fundamental principle of life, which states that people must live, is the background to the problem of the lives of disabled people. Particularly during wartime, the increase in the number of people disabled in wars and through accidents and illnesses in daily life makes the existence of disabled people plain for all to see. This research seeks to make up for the shortage of such research by (1) analyzing work and public service pensions, which support the lives of disabled people, and (2) analysis from the perspective of social systems.T o clarify (1), we analyze the financial state of the households of disabled people, the systems that support their household finances. Regarding (2), this research adopts the perspective of the social history of medicine and the history of nursing care to examine systems that have affected the lives of disabled people.

研究分野：近代日本看護史

キーワード：戦争と障害　障害者対策の歴史　戦傷者対策の歴史

１．研究開始当初の背景

（１）戦争と障害との関係を分析する本研究は、学術創成研究『総合社会科学としての社会・経済における障害の研究』（平成 19 年度～23 年度、研究代表者：松井彰彦（東京大学）、以下「松井科研」。）および基盤研究（B）『障害者の労働に関する比較史的研究』（平成 23 年度～平成 26 年度、研究代表者：藤原哲也（福井大学）、以下「藤原科研」。）に連続している。松井科研では、①障害者のあり方が歴史的に規定されていること、②諸制度、組織、専門職が障害者の生活に大きな影響を与えていることの２点が明らかにされた。参加研究者は同研究の過程で工業化が障害者に大きな影響を及ぼしたことを認識したため、さらに藤原科研では、工業化の進展によって障害者はより一層労働能力を重視されるようになり、職業訓練政策と相まって就労可能な障害者が労働市場に参入する一方、就労困難な障害者が労働市場から排除されるという二極化現象を見出した。さらに、我々の研究では、2 度の世界大戦においても上述の科研研究で着想を得た二極化現象（障害者の労働市場への参入／排除）は、分析対象国間で多少の差異はありつつも、各国間に同様の傾向があることを見出した。

（２）そこで、本研究では、この二極化現象という仮説をふまえつつ、①所得保障②職業訓練③労働④家族⑤教育⑥治療⑦ケア⑧社会復帰の分析枠組に基づいて、日本・イギリス・ドイツ・アメリカにおける２度の世界大戦を中心とした戦争と障害者のあり方の変容を分析した。

２．研究の目的

本研究の目的は、近代以降に起こった 2 度の世界大戦によって、日本・アメリカ・イギリス・ドイツにおける障害に関する認識がどのように変化し、どのような障害者対策がとられ、障害者の生活にいかなる影響をおよぼしたのかを分析することにある。

戦争に注目した理由は、我々の研究の過程で、2 度の世界大戦による戦傷病者の増加によって、国家が戦傷病者のみならず一般障害者の存在を無視できなくなり、結果、障害者対策がより推進されたという知見を得たからである。本研究では、まず有事における障害者対策の内容を①所得保障②職業訓練③労働④家族⑤教育⑥治療⑦ケア⑧社会復帰の視点から明らかにし、その上で、障害者の生活や社会的地位が「どのように」変化し、「なぜ」そうなったのかを比較検討した。

３．研究の方法

平成２７年度は「基盤形成期」と位置づけ、国際学会での報告、定期研究会の開催、各研究者による史料収集を行った。まず、国際学会での報告については、研究代表者である山下、分担者である藤原、今城が、イギリスの SOAS(University of London)で開催された British Association for Japanese Studies 主催の学会に出席し、日本赤十字社の活動（山下）、傷痍軍人の処遇（藤原）、恩給制度の発展史（今城）を報告する機会を持った。

平成２８年度は、「基盤形成期」と位置づけ、第１は２０１７年５月２１日開催予定の日本西洋史学会エントリーに向けた研究の準備と精緻化をし、第２は SOAS の Japan Research Centre が発行している Japan Forum への投稿準備を念頭においた研究分担者の報告を核とする定例研究会の開催、各研究者による資料収集をおこなう年度となった。まず、研究会では、第１に鈴木は精神障害をテーマに昭和戦前期東京における精神病院利用の背景をテーマに報告をおこなった。（２０１６年９月１３日、同志社大学）。第２に第６７回日本西洋史学会小シンポジウムへのエントリーに向けて、研究分担者である中野が取りまとめ役となり、１９２０年代から１９４０年代ドイツにおける当事者運動と障害、大谷が１９３０年代から１９５０年代イギリスにおける知的障害児の親の声、藤原が第二次世界大戦前後におけるアメリカ合衆国における戦争障害者の生活支援をテーマに報告をおこなった。（２０１６年１１月３日、京都産業大学）

平成２９年度は、日本を研究対象とする研究分担者、日本以外の国を研究対象とする研究分担者ともに、研究成果を学会にて具体的に発信するともに、海外での研究発信に向けての道筋ができた。第１に、日本西洋史学会第６７回大会（２０１７年５月２１日、一橋大学本館３階３８教室）の小シンポジウムにおいて、中野が１９２０年代から４０年代ドイツにおける障害当事者運動の歴史、大谷が１９３０年代から５０年代イギリスにおける知的障害児の親の声の歴史、藤原が第二次世界大戦前後における日本の戦争障害者の生活支援、鈴木が 20 世紀前半の東京における精神障害とジェンダーに関する報告をした。当日は障害学にも詳しい市野川容孝氏（東京大学）およびドイツの医療史家である川越修氏（同志社大学）をコメンテーターとして迎え、障害の歴史に関する活発な議論が交わされた。第２に、定期研究会で、SOAS, University of London の Japan Research Centre 所属の Christopher Gerteis 氏を迎え、山下が第二次世界大戦時における日本赤十字社の看護の歴史、藤原が戦傷病者の妻へのインタビューの紹介、今城が日本の傷痍軍人対象の恩給の歴史、長廣が鉄道の仕事の過程で障害者となった人々に対する福祉の歴史について、英語で報告をし、ディスカッションをした。（２０１７年６月１８日、同志社大学）。第２に Japan Forum への投稿を予定している山下が日本赤十字社看護婦の戦時救護の歴史、大谷がダウン症を題材とした医学の歴史、長廣が鉄道弘済会の歴史、今城が傷痍軍人を対象とした恩給の歴史、藤原が福井県の戦傷病者の生活実態に関する報告をおこなった。（２０１８年３月４日、５日、同志社大学）。

平成３０年度は英語による学術論文発表に向けて、学会報告をし、かつ working paper を公表

した。第１は Japan Research Centre 主催の workshop における報告である(２０１９年３月１日、Room T102、SOAS, University of London)。山下が日本赤十字社の看護婦による傷痍軍人のケア、今城が傷痍軍人とその家族の生活水準、藤原が福井県を事例とした傷痍軍人とその妻、長廣が鉄道弘済会をソーシャルビジネスと位置付けた障害者対策の歴史、大谷が先天的障害者としての日本のダウン症に焦点をあてた報告をした。Japan Research Centre 所属の研究者が出席する workshop での報告が、同センター出版の学術誌 Japan Forum 投稿条件の１つであり、この報告をもって、その条件についてはクリアした。第二次世界大戦の勃発によって傷痍軍人を含む障害を持った人々がどのように処遇されたのか、第二次世界大戦の勃発が戦後の障害を持った人々の生活にどのように影響したのか、そして、このような状況の中で障害を持った人々はいかにして生活を成り立たせていたのかという問題意識のもとで進めてきた本科研費での研究は、日本に興味を持つ外国籍の研究者や学生にとって問題意識を含めて新しい方向性を持っているという意味でインパクトを残せた。

第２は和歌山大学経済総合研究所の working paper series への論文提出である(登録番号 19-03 A History of Disability in Modern Japan: The Impact of World War II on People with Disabilities, Toshitaka Nagahiro, Mai Yamashita, Toru Imajoh, Tetsuya Fujiwara, Makoto Ohtani,２０１９年３月２９日)。この working Paper を基にして、２０１９年度中に Japan Forum に投稿する予定である。

第３は今城が University of Sheffield（United Kingdom）で日本の傷痍軍人の恩給の歴史に関する研究報告をおこない（２０１８年６月７日)、イギリスやアメリカ合衆国の障害学の研究者からコメントを得ることができた。また山下が 35th Annual American Association for the history of Nursing Conference で第二次世界大戦時における日本赤十字社の戦時救護の歴史に関する研究報告をおこない、看護史や女性史の研究者からのコメントを得、上記 SOAS での方向に向けて Paper を改定することができた。

４．研究成果

障害者の生活という問題は、人は生きていかなければならないという生物の基礎原理が背後にある。とりわけ、戦時期に、先天的障害のみならず、生活の困窮や戦闘による障害者の増加によって障害者の存在が顕在化した。このような顕在化した事実の確認はもちろん重要である。しかしながら、顕在化した障害者がどのように生活をしてきたのかという論点を取り扱った先行研究は少ない。**本研究の最大の成果は、この研究上の不足を補うべく、（１）障害者の生活を支える労働および恩給、（２）社会制度の観点から分析を進めた点にある。**

（１）を明らかにするために、障害者が属している家庭における家計および家計を支える制度を分析した。今城は、日本のある農村出身の傷痍軍人が提出した恩給の申請書類を用いて、彼らの生計状態を数値化し、恩給を中心とした傷痍軍人の日常生活に関する歴史研究を発信した。長廣は、日本国有鉄道を事例として、戦時下の労働災害がどのようなものであったのかを明らかにし、戦前期の日本国有鉄道の障害者福祉施策についても記した。さらに、第二次世界大戦後、鉄道傷痍者の生活を支える目的で活動をしていた鉄道共済会が事業を福祉から営利に転換した事実に注目し、この組織が経済（性）と福祉をどのように両立させようとしていたのかという今日的問題について議論した。藤原は、福井県傷痍軍人・妻の会に所属していた女性のインタビューを用いて、オーラル・ヒストリーの方法論で、傷痍軍人が日常生活をおくるにあたっての妻の役割の重要性について具体的に検討した。

次に、（２）に関して、特に第二次世界大戦前の日本では、障害の種類によっては障害者の存在自体が社会的に認識されていない場合もあった。社会の中で障害者が認識されていく大きなきっかけは、障害者の診断、治療、看護を内容とする医療に関係する制度の成立であった 。まず、先天的な障害を持った者の歴史研究は非常に少ない。そこで、大谷が、近現代日本における戦争、ダウン症、医学の関係性を議論した。戦前において注目をされていなかったダウン症の人々が、第二次世界大戦後、専門家にどのように認識され、そのことが障害者の見方や処遇にどのような影響を及ぼしたのかという新たな視点を提示した。次に、戦地で戦傷病者がどのようにケアされたのかという問題は、戦傷病者となった者のその後の生活の内容を左右するため、重要な主題である。山下が、日本赤十字社の看護婦および戦傷病者が記した著書を検討することによって、第二次世界大戦時における戦傷病者の複雑な心理や苦悩を浮き彫りすると同時に、日本赤十字社の看護婦が傷痍軍人のケアをしたことによってより強く認識した専門職としての自覚や忸怩たる思いを日本社会におけるジェンダー構造の特徴を踏まえつつ明らかにした。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計７件）

① Mai Yamashita, “The Nursing History of The Japanese Red Cross Society for Disabled Soldiers in World War II, Japan” in Nagahiro, Toshitaka eds., “A History of Disability in Modern Japan: The Impact of World War II on People with Disabilities,” Working Paper Series, Wakayama University, 2019, pp.1-27. （査読なし）（DOI なし）https://www.wakayama-u.ac.jp/eco/souken/bulletin/kworking.html

② Toshitaka Nagahiro, “Japanese National Railways as a Social Enterprise: The Welfare Management of Tetsudou Kousaikai” in Nagahiro, Toshitaka eds., “A History of Disability in Modern Japan: The Impact of World War II on People with Disabilities,” Working Paper Series, Wakayama University, 2019, pp.1-21. （査読なし）（DOI なし）https://www.wakayama-u.ac.jp/eco/souken/bulletin/kworking.html

③ Toru Imajoh, “Disabled soldiers and their Families: Daily Life in Japan, WWII” n Nagahiro, Toshitaka eds., “A History of Disability in Modern Japan: The Impact of World War II on People with Disabilities” Working Paper Series, Wakayama University, 2019, pp.1-27. （査読なし）（DOI なし）
https://www.wakayama-u.ac.jp/eco/souken/bulletin/kworking.html

④ Tetsuya Fujiwara, “Living with Wounded Husbands: Oral History of Japanese Disabled War Veterans’ Wives in Fukui Prefecture” in Nagahiro, Toshitaka eds., “A History of Disability in Modern Japan: The Impact of World War II on People with Disabilities,” Working Paper Series, Wakayama University, 2019, pp.1-20. （査読なし）（DOI なし）
https://www.wakayama-u.ac.jp/eco/souken/bulletin/kworking.html

⑤ Makoto Ohtani,“War, Down’s Syndrome, and Medicine: The Case of Modern and Contemporary Japan” in Nagahiro Toshitaka eds., “A History of Disability in Modern Japan: The Impact of World War II on People with Disabilities,” Working Paper Series, Wakayama University, 2019, pp.1-18. (査読なし)(DOI なし)
https://www.wakayama-u.ac.jp/eco/souken/bulletin/kworking.html

⑥ 中野智世「ナチ体制下ドイツにおけるカトリック・カリタス――共存と抵抗のあいだで」『ヨーロッパ文化研究』（第 38 集、2019）、pp.1(148) -32(117).（査読なし）（ＤＯＩなし）（オープンアクセス：成城大学リポジトリを介して公開）

⑦ Akihito Suzuki, Akinobu Takabayashi, “Life, Science, and Power in History and Philosophy” in East Asian Science, Technology and Society,13(1), 2019, pp.9-16, 査読有.
https://doi.org/10.1215/18752160-7338333

〔学会発表〕（計 16 件）

① Mai Yamashita, “The Nursing History of The Japanese Red Cross Society for Disabled Soldiers in World War II” Japan Forum 'History of Disability' Workshop, SOAS, 1 March,2019.
https://www.soas.ac.uk/jrc/events/01mar2019-japan-forum-history-of-disability-workshop.html

② Toshitaka Nagahiro, “Japanese National Railways as a Social Enterprise: The Welfare Management of Tetsudou Kousaikai” Japan Forum 'History of Disability' Workshop, SOAS, 1 March,2019.
https://www.soas.ac.uk/jrc/events/01mar2019-japan-forum-history-of-disability-workshop.html

③ Toru Imajoh, “Disabled soldiers and their Families: Daily Life in Japan, WWII” Japan Forum 'History of Disability' Workshop, SOAS, 1 March,2019.
https://www.soas.ac.uk/jrc/events/01mar2019-japan-forum-history-of-disability-workshop.html

④ Tetsuya Fujiwara, “Living with Wounded Husbands: Oral History of Japanese Disabled War Veterans’ Wives in Fukui Prefecture” Japan Forum 'History of Disability' Workshop, SOAS, 1 March,2019.
https://www.soas.ac.uk/jrc/events/01mar2019-japan-forum-history-of-disability-workshop.html

⑤ Makoto Ohtani, “ War, Down’s Syndrome, and Medicine: The Case of Modern and Contemporary Japan” Japan Forum 'History of Disability' Workshop, SOAS, 1 March,2019.
https://www.soas.ac.uk/jrc/events/01mar2019-japan-forum-history-of-disability-workshop.html

⑥ Mai Yamashita, “ The Nursing History Of The Japanese Red Cross Society For Disabled Veterans in World War II, Japan”, AAHN 35TH Annual Conference, American Association for the History of Nursing, Sheraton San Diego Hotel & Marina, San Diego, United States Of America, 14 September, 2018.

⑦ 藤原哲也「福井県の戦傷病者の家族のオーラル・ヒストリー」第 16 回日本オーラル・ヒストリー学会大会（選考有）,東京家政大学, 2018 年 9 月 2 日。

⑧ Toru Imajoh, “The Daily Lives of Disabled Veterans and Their Families in World War II Japan” by

Histories of Disability: local, global and colonial stories, 7 June, 2018, University of Sheffield, Sheffield, UK.
https://networks.h-net.org/node/73374/announcements/800707/histories-disability-local-global-and-colonial-stories-june-7-8.

⑨ 大谷誠「近現代日本におけるダウン症候群と小児科学」、一般演題、第 119 回日本医史学会総会・学術大会、鹿児島県医師会館（選考有）、2018 年 6 月 3 日。

⑩ Tetsuya Fujiwara, "What Forgotten People Tell Us: Oral History of Japanese Disabled War Veterans and Their Families." (Colloquium on Teaching History, University of Iowa, U.S.A.), 27 March 2018, （招待講演）.

⑪ 大谷誠「知的障害児の親の声――1920 年代から 1950 年代のイギリスを事例として」、シンポジウム 6「障害の歴史――20 世紀前半における英・米・独・日の事例から――」（企画　中野智世）、第 67 回日本西洋史学会大会、一橋大学（選考有）、2017 年 5 月 21 日。

⑫ 中野智世「当事者運動と障害の序列化―1920 年代～40 年代ドイツにおける『身体障害者連盟』の活動を手がかりに―」、シンポジウム 6「障害の歴史――20 世紀前半における英・米・独・日の事例から――」（企画　中野智世）、第 67 回日本西洋史学会大会、一橋大学（選考有）、2017 年 5 月 21 日。

⑫ 藤原哲也「第二次世界大戦前後の合衆国における戦争障害者の生活支援」、シンポジウム 6「障害の歴史――20 世紀前半における英・米・独・日の事例から――」（企画　中野智世）、第 67 回日本西洋史学会大会、一橋大学（選考有）、2017 年 5 月 21 日。

⑬ 鈴木晃仁「精神障害とジェンダー―20 世紀前半東京の精神病院における症例誌の分析から―」、シンポジウム 6「障害の歴史――20 世紀前半における英・米・独・日の事例から――」（企画　中野智世）、第 67 回日本西洋史学会大会、一橋大学（選考有）、2017 年 5 月 21 日。

⑭ Tetsuya Fujiwara, "The Livelihoods of Japanese Disabled War Veterans in the Post-Pacific War Period," in Panel: "War Veterans and Disability in Modern Japan." (British Association for Japanese Studies, Annual Conference 2015, University of London, U.K.)（選考有）,11 September,2015.
https://www.soas.ac.uk/jrc/events/british-association-for-japanese-studies-bajs-annual-conference-2015/file102356.pdf

⑮ Mai Yamashita, "What is The Peacetime Relief of JRC before the Second World War?" (British Association for Japanese Studies, Annual Conference 2015, University of London, U.K.)（選考有）,11 September,2015.
https://www.soas.ac.uk/jrc/events/british-association-for-japanese-studies-bajs-annual-conference-2015/file102356.pdf

⑯ Toru Imajoh, "The Development of Military Pension in prewar Japan" (British Association for Japanese Studies, Annual Conference 2015, University of London, U.K.)（選考有）,11 September,2015.
https://www.soas.ac.uk/jrc/events/british-association-for-japanese-studies-bajs-annual-conference-2015/file102356.pdf

〔図書〕（計 2　　件）

① 大谷誠、他「地域による『精神薄弱者』の支援と排除――二〇世紀前半イングランドの職業センター」、三時眞貴子・岩下誠・江口布由子・河合隆平・北村陽子編著『教育支援と排除の比較社会史――「生存」をめぐる家族・労働・福祉』、昭和堂、2016 年 10 月、第 4 章、110 - 133 頁。（査読無）

② 大谷誠、他「イングランドにおける『低能児』――1930 年代～50 年代」、志村真幸編著『異端者たちのイギリス』、共和国、2016 年 4 月、136 - 155 頁。（査読無）

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0　　件）
○取得状況（計 0　　件）

〔その他〕

６．研究組織
(1)研究分担者

研究分担者氏名：大谷 誠

ローマ字氏名：OHTANI,makoto

所属研究機関名：同志社大学

部局名：人文科学研究所

職名：研究員

研究者番号（8 桁）：10536105

研究分担者氏名：今城 徹

ローマ字氏名：IMAJOH,toru

所属研究機関名：阪南大学

部局名：経済学部

職名：准教授

研究者番号（8 桁）：20453988

研究分担者氏名：藤原 哲也

ローマ字氏名：FUJIWARA,tetsuya

所属研究機関名：福井大学

部局名：学術研究院医学系部門

職名：教授

研究者番号（8 桁）：30362338

研究分担者氏名：長廣 利崇

ローマ字氏名：NAGAHIRO,toshitaka

所属研究機関名：和歌山大学

部局名：経済学部

職名：准教授

研究者番号（8 桁）：60432598

研究分担者氏名：鈴木 晃仁

ローマ字氏名：SUZUKI, akihito

所属研究機関名：慶應義塾大学

部局名：経済学部

職名：教授

研究者番号（8 桁）：80296730

研究分担者氏名：中野 智世

ローマ字氏名：NAKANO, tomoyo

所属研究機関名：成城大学

部局名：文芸学部

職名：教授

研究者番号（8 桁）：90454470

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。